KYOTO MEDICAL ASSOCIATION
Be Well
医師会からの健康だより
■発行／一般社団法人 京都府医師会
これだけは知っておきたい
健康の知識
VOL. 76

# 予防方法は？

感染者の気道分泌物（鼻汁、喀痰など）からの接触感染が一番の感染経路であり、**感染予防は手洗いが基本です。流水による手洗いが原則ですが、アルコールでも感染力を失わせることができます。** タオルなどの洗面具から感染することもあり、**個別に使用することをお薦めします。** 咳やくしゃみなどの飛沫も重要な感染経路となり、**マスクを着用することや感染者をカーテンで囲うなどの工夫も大事** です。

またRSウイルスについては重症化する危険性の高い乳幼児に対してはパリビズマブ（商品名：シナジス）という製剤による**予防接種が行われています。** 下の表に示した乳幼児が保険適応となりますが、お子さんは接種すべきかどうかはかかりつけ医にご相談ください。

**パリビズマブ（商品名：シナジス）予防投与の対象**

- 在胎28週未満に出生した早産児で、12か月以下の新生児および乳児
- 在胎29～35週の早産児で、6か月以下の新生児および乳児
- 過去6か月以内に気管支肺異形成症の治療を受けた24か月以下の新生児および乳幼児
- 血行動態に異常のある先天性心疾患をもつ24か月以下の新生児および乳幼児
- 免疫不全を伴う24か月以下の新生児および乳幼児*
- ダウン症候群で24か月以下の新生児および乳幼児*

＊ 投与するかどうかは、かかりつけ医が学会等から提唱されているガイドライン等を参考にした上で判断します。

一般社団法人 京都府医師会
〒604-8585 京都市中京区西ノ京東栂尾町6 TEL:075-354-6101
<ホームページ>http://www.kyoto.med.or.jp <E-mail>kma26@kyoto.med.or.jp ●発行 WINTER 2016●

# RSウイルス感染症 ヒトメタニューモウイルス感染症

KYOTO MEDICAL ASSOCIATION
Be Well
医師会からの健康だより
■発行／一般社団法人 京都府医師会
これだけは知っておきたい
健康の知識
VOL. 76

感染すると風邪に似た症状で
ほぼ自然治癒する
感染症ですが…

**赤ちゃん・高齢者等は重症化に注意が必要！**

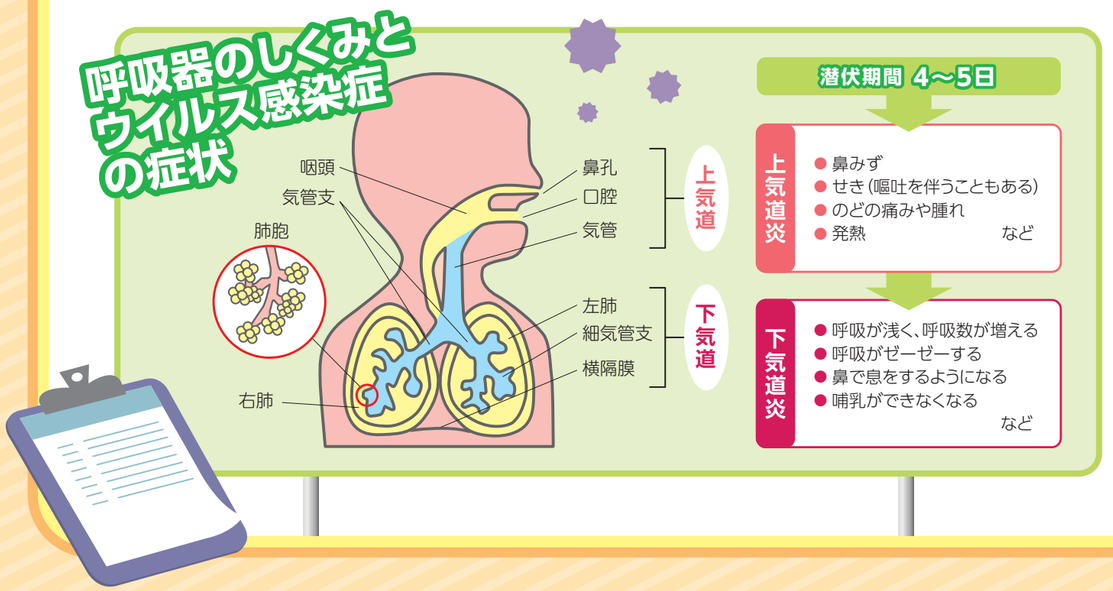
# RSウイルス感染症、ヒトメタニューモウイルス感染症とは

RSウイルス感染症、ヒトメタニューモウイルス感染症の大部分は軽度の発熱、鼻水、咳のみの上気道炎、いわゆる「かぜ」の症状を呈し、特別な治療を必要とせず、自然に治癒します。しかし、乳幼児、高齢者、がんの治療中の方などでは感染症に対する抵抗力が低いため、気管支炎、細気管支炎、肺炎などの下気道炎に進展し、時に重症化して命にかかわることもあります。

## どのようなことに注意しないといけないのでしょうか

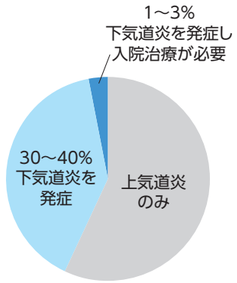
**主な症状**

発症初期はいわゆるかぜ症状のみですが、数日を経て下気道炎へと進行すると、喘鳴（ぜんめい、ゼーゼーした呼吸）、多呼吸などの症状が見られます。**この症状が出現すると特に乳児では急速に呼吸困難が進行することがあり、早めに小児科を受診することが重要です。**また高熱が長引く場合は細菌による中耳炎、肺炎を合併していることがありますので注意が必要です。

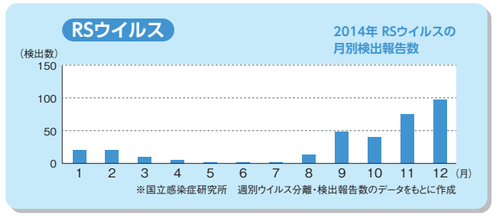


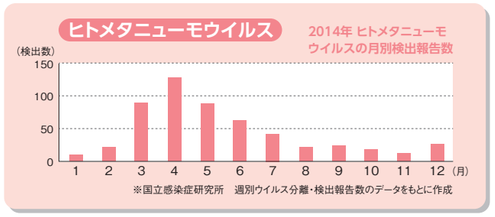

## いつごろ流行しますか

我が国では下図のように**RSウイルスは秋口から流行が始まり、12～2月に流行のピークが見られます。**一方、**ヒトメタニューモウイルスはそれに遅れて3～6月に流行します。**RSウイルス感染症は2歳までにほぼ100%の人が感染します。一方、ヒトメタニューモウイルスは、生後6か月ごろから感染が始まり、2歳までに50%、5歳までに75%、10歳までにはほとんどの人が感染します。**初感染が重症化しやすいとされていますが、両者ともに生涯に何度でも感染を繰り返します。**




RSウイルス感染による下気道炎発症の割合




## どのように診断しますか

RSウイルス感染症とヒトメタニューモウイルス感染症は**診察のみで区別することは困難です。鼻分泌物からウイルスを検出することで診断を確定することができます。**生後6か月未満の低月齢や喘鳴・多呼吸などの症状を認める場合は、重症化の恐れがあるため、診断を確定することが重要です。一方、年長児以上で、かぜ症状のみの場合は必ずしも検査の必要はありません。

## どのように治療しますか

RSウイルス感染症、ヒトメタニューモウイルス感染症ともにウイルスそのものを抑える治療はなく、**対症療法が基本です。**かぜ症状のみの場合は自宅安静で十分であり、症状に応じて解熱薬、鎮咳薬、去痰薬などを用います。**気管支炎、細気管支炎、肺炎に対しては入院治療を必要とすることも**あり、重症度に応じて適切な輸液、酸素投与、気管支拡張薬や喀痰溶解薬、高張食塩水などのネブライザー吸入などが行われます。また細菌感染症を合併した場合は抗菌薬を使用します。